

オテロ

作曲：ジョセッペ・ヴェルディ
初演：1887年ミラノ・スカラ座

第1幕

いきなりのフォルティッシモで幕が開くと、そこはヴェネツィア共和国支配下のキプロス島。大嵐の中、人々は港に集まり、ヴェネツィア艦隊を見守ります。漸くのことで入港した旗艦から降り立った司令官にしてキプロス総督のムーア人・オテロ (Otello：テノール)、開口一番「喜べ！ Esultate!」と、イスラム教徒の艦隊は沈んだと叫び、人々は歓喜します。騒ぎが収まって、納得いかない面持ちの二人。オテロの旗手イアーゴ (Iago：バリトン) とロデリーゴ (Roderigo：テノール)。イアーゴは望んでいた副官の地位に若くて気のいい美男のカッシオ (Cassio：テノール) が任命されたのを恨んでおり、ロデリーゴは焦がれていたデスデモナ (Desdemona：ソプラノ) がオテロと結婚してしまったのを逆恨みしているのです。二人は組んで復讐を果たすこととします。

やがて人々が集まって祝勝の宴が始まります。イアーゴはいまいち酒癖のよくないカッシオに飲ませ、やがてカッシオはつまらない諍いから前総督のモンターノ (Montano：バリトン) に剣を抜き、傷を負わせてしまいます。大騒ぎ。駆け付けたオテロ、カッシオを副官から解任します。意気消沈して去るカッシオ。人々を収め立ち去らせて、残るはオテロとデスデモナのみとなります。愛を語らう二人の長い二重唱、「口づけを...今一度口づけを Un bacio...ancora un bacio」と口づけを交わしつつ二人は城に戻ります。

第2幕

翌日。城内。イアーゴはカッシオに相談を受け、オテロへの取りなしをデスデモナに頼むよう入れ知恵します。カッシオが立ち去ると、イアーゴは「残忍な神を信じる Credo in un Dio crudel」と、己と人間に巢喰う悪徳と卑劣を信じる、と自らの悪の信条を歌います。舞台の離れた所にデスデモナが登場、カッシオが話し掛け二人が話し込んでいるところにオテロ登場。イアーゴは意味ありげにデスデモナとカッシオについてなにやら巧みに仄めかします。イアーゴの仄めかしに苛立つオテロ、忠義を装い嫉妬に気をつけよ、デスデモナの言葉に気をつけよと語る (しかし決定的なことは全く言わない!) イアーゴ。もとより年齢や異国人であることにコンプレックスのあるオテロは、デスデモナを疑い始めます。そうとは知らぬデスデモナ、旧知のカッシオに頼まれてオテロを取りなそうとします。さては? と睨んだオテロ、不機嫌に断ってデスデモナを追い払います。デスデモナがオテロの額に当てようとしたハンカチをオテロは振り払います。ハンカチを拾ったのはデスデモナの侍女でイアーゴの妻・エミーリア (Emilia：メゾソプラノ)。イアーゴはエミーリアからそのハンカチを取り

上げます。疑われているとは思ってもよらぬデスデモナは不思議に思いながら立ち去ります。

やはり、と疑いが深まるオテロを眺め、イアーゴは「毒が回った」とほくそ笑みます。声を掛けるイアーゴにあたり、激昂して「さらば神聖な思い出よ Ora e sempre addio, sante memorie,」と、オテロの栄光は終わったと激します。だがしかし信じ切れぬと証拠を求めるオテロに、イアーゴはカッシオの寝言をでっち上げ、止めにオテロがデスデモナに贈ったハンカチをカッシオが持っていた、と告げます。

遂に確信に至ったオテロ、復讐と血を求め、「あの大理石の空に誓う Si, pel ciel marmoreo giuro!」と復讐を歌います。それを助けよう、と重ねて誓うイアーゴとの壮烈な二重唱の内に幕。

第3幕

更なる証拠を求めイアーゴとカッシオを待つオテロのもとにデスデモナがやってきます。あくまで優しげなデスデモナに、オテロはあのハンカチをと求めますが、デスデモナは持っていません。ハンカチを執拗に求めるオテロが貞節を疑うので、デスデモナは泣いて潔白を訴えます。オテロは「お前を汚れた娼婦だと思っていたのだ」と言って下がらせると、「神よ、あなたは私に Dio! mi potevi」と恥辱にまみれた境遇を嘆きます。

イアーゴ登場。オテロを隠れさせます。カッシオも登場。カッシオの情人の話をするイアーゴ。得意げに楽しそうに情人の話をし、更に匿名で届いたハンカチが、と取り出してみせるカッシオ。オテロは"デスデモナ"の名、カッシオの話しぶり、あのハンカチを出す姿しか見聞き出来ず、怒りは深まります。そこに本国からの船の到着を知らせる大砲。

オテロはデスデモナを絞め殺す覚悟を決め、イアーゴはカッシオに備えると語ります。

ヴェネツィアよりの使者ロドヴィーコ (Lodovico : バス) 一行を迎えるオテロ。苛立ちながら本国からの書簡を読みつつ、デスデモナの言葉に辛く当たります。やおらカッシオを呼び出すオテロ。

カッシオが来た所で、デスデモナへの罵りの言葉を交えつつ、本国の指示を伝えます。自分は本国に召還される(泣くふりをするがいい!)、後任はカッシオ、部下、船、城は新指揮官に任せる(泣き続けるがいい)。遂に耐え切れずデスデモナを面罵します。驚く一同、嘆くデスデモナ。オテロは狂乱して皆に去るように言い、最後にデスデモナを呪います。

悶絶して倒れるオテロ。傲然と見下し、毒が回ったと勝ち誇るイアーゴ。外からは「オテロ万歳! ヴェネツィアの獅子に栄光を! Evviva Otello! Gloria al Leon de Venezia!」の声。「これがその獅子だ! Ecco il Leone!」と嘲るイアーゴ。

第4幕

オテロとデスデモナの寝室。エミーリアに付き添われてデスデモナが寝支度をしています。婚礼の夜の寝着を用意するようにと頼むデスデモナ。心配するエミーリアに、デスデモナは男に裏切られて死んだ娘の話をし、その娘の好きだった歌「歌いながら泣く Piangea cantando」、通称柳の歌を歌います。エミーリアが退出すると、感極まったデスデモナは

アヴェ・マリア Ave Maria を歌い、床に就きます。

デスデモナが寝入った所にオテロ登場。そっとデスデモナに口づけします。目を覚ましたデスデモナに殺すと告げるオテロ。弁明も命乞いも聞かず、せめてお祈りをする間だけでもとの願いも聞かずに首を絞めます。気を失うデスデモナ。エミーリアがやってきてカッシオがロデリーゴを殺したと告げますが、中の変事を目にするや、人を呼びます。息絶えるデスデモナ。エミーリアはハンカチは自分からイアーゴが奪ったものだと言います。カッシオは、ロデリーゴに襲われたが返り討ちにした、彼は全てを明かして息絶えたと話します。事が露見したと逃げ出すイアーゴ。

オテロはイアーゴを追うこともせず、「私を恐れることはない Niun mi tema」と、剣を落として自らの過ちから殺してしまったデスデモナの許へ行き、嘆き、隠し持っていた短剣で自らを深々と刺します。苦しみの内にデスデモナへとにじり寄り、「今一度口づけを... un bacio ancora」と、いつかの言葉を繰り返しながら息絶えます。幕。